

言語文化教育としての『民話』を活用した学術的・国際的な地域還元型教育*

橋尾直和・井上次夫・オバーグ アンドリュー・高西成介・田中裕也

本報告は、高知県立大学における学長助成事業に採択されたテーマ「言語文化教育としての『民話』を活用した学術的・国際的な地域還元型教育」の一環として実施した、高知県立大学「戦略的研究推進プロジェクト成果報告」講演・シンポジウム「民話について考える一言語文化の視座から」の内容をまとめたものである。

1. プロジェクト構想の背景

本県の「民話」（昔話・伝説・世間話など）の採集は、昭和10年代から始められ、戦後も、研究者たちによって貴重な話が記録されてきた。しかし、一般的には民俗調査の副産物として偶然採集されたものが多く、内容、形式に関心が集中し、話のみを採集し、語りの場や伝承経路、話の機能、家やムラなどの話者をとりまく諸問題との関連を明らかにしたものは、あまり見られない。民間伝承としての「民話」は、他の民俗事象と同じく家やムラを離れて存在するものではなく、それを生み出し伝承してきた地域社会との関連において、構造的・総合的に考察しなければならない。「語り部がいなくなった」と言われる昨今であるが、調査の手を差し伸べられずに眠っている語り部はまだ存在する。全国には多くの民話集や調査報告書が刊行され、もはや整理と比較研究の段階に入ったとも言われているが、高知県にはまだ学術的調査から取り残されている地域が多い。これらの地域における正確な記録・保存活動を急がねばならない。すなわち、本県における「民話」という地域文化資源の再発見とその利活用という発想が求められる。

また、採集した「民話」を教育現場に還元する、いわゆる「地域還元型教育」という発想も必要となってくる。地域の文化資源である「民話」のもつ教育力を大いに教育現場で活用することである。語り部が「民話」を生徒・学生たちに語ることは、地域文化の次世代への継承へとつながる活動となり得る。「民話」に登場する地名、文化財、伝統行事、風習、方言などを生徒・学生たちが調査研究することにより、地域の歴史・文化・環境などを同時に学ぶことができ、学習指導要領に掲げられている「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」と重なるところである。

これは、本プロジェクトが展開しようとしている、言語文化教育としての「民話」を活用した地域還元型教育研究が、大学のみならず小・中・高等学校の教育理念と連動していることを意味している。

* 本報告は、高知県立大学文化学部「戦略的研究推進プロジェクト」チーム（編）『講演・シンポジウム 民話について考える一言語文化の視座から』（2020年3月）をもとにしている。

すなわち、「継承されてきた伝統的な言語文化に親しみ、継承・発展させる態度を育てることや、国語の果たす役割や特質についてまとまった知識を身に付けさせ、言語感覚を豊かにし、実際の言語活動において有機的に働くような能力を育てることをねらい」とする理念と合致している。そして、この点は、本学の掲げる中期計画の「高大連携」の目標と合致するところでもある。

2. 講演・シンポジウム「民話について考える—言語文化の視座から—」

本プロジェクトの成果報告として、2019（令和元）年11月30日（土）13：00～16：20、高知県立大学永国寺キャンパス教育研究棟1階A101講義室において、高知県立大学「戦略的研究推進プロジェクト成果報告」講演・シンポジウム「民話について考える—言語文化の視座から—」を開催した。

講演・シンポジウムの内容は、下記のとおりである。

第1部において、『学校の怪談』で有名な民俗学者、国立歴史民俗博物館名誉教授・総合研究大学院大学名誉教授の常光徹先生が、「民話と俗信の世界」と題して、基調講演を行った。常光先生は、「民話の聞き取りに当たっては、『目で見えるモノ』『耳で聞くコトバ』『感覚に訴えるココロ』が関係し合っていて民話が伝承されている、という認識を持って話を聞いてほしい」と呼びかけられた。

第2部において、文化学部の言語文化系の教員が、成果報告を行った。

報告1では、橋尾直和教授が「民話の記録・保存および活用—大豊町と物部町の事例—」と題して、長岡郡大豊町岩原と香美市物部町別府の民話の収集・記録と保存および活用の方法について解説した。フィールドワークによって収集した蛇淵や不入山、七人ミサキなどの民話を挙げ、山間部では、今でも詳細な民話が伝承されていることを説いた。

報告2では、井上次夫教授が「国語教育における民話」と題して、教科書で採用されている民話（日本国内・外国）の教材としての取り扱い方、教育現場での新旧学指導要領に基づく民話の指導の在り方について解説した。

報告3では、田中裕也講師が「民話への認識の変容と戦後高知」と題して、民話（怪異）が合理化される過程や『月刊高知』における作家と高知との関わりについて「戦争、自身という連続した災害のなかで民話を用いて高知の読者に『笑い』を与えようとしていた姿勢が見られる」と解説した。

報告4では、オバーク・アンドリュース准教授が、「浦上崩れと土佐」と題して、キリシタン進行を表明した長崎県浦上村の村民たちが、江戸幕府の指定によって大量に捕縛されて拷問を受けた「浦上四番崩れ」によって土佐に流刑されたキリシタンと江の口カトリック教会との関係について解説した。

報告5では、高西成介教授が「中国民話の世界—土佐の民話との比較から—」と題して、日本の「鍛冶屋のかかの話」と土佐の「鍛冶が媼（ばば）」に登場する「狼」と中国説話に登場する「狼」「虎」との関係、朝鮮における類話などについて解説した。

第3部において、登壇者全員によるパネルディスカッションを行った。冒頭、語源未詳とされてきた昔話の結びのことばである「昔まっこうさるまっこう、猿のつべはぎんがりこ」の語源が判明したことを発表した。その後、ディスカッションの中で「災害と伝説は、密接に関わっているのではない

か」「昔話には、教訓や先人の知恵が詰まっている」などの意見が交わされた。

3. プロジェクトの活動を終えて

高知県立大学「戦略的研究推進プロジェクト成果報告」講演・シンポジウム「民話について考える―言語文化の視座から―」の最後に、プロジェクト代表者の橋尾教授が、「民話を後世に伝えるため、語りの場を整備し、自分たちも語り部になる、という意識が大切である」と締めくくった。

なお、講演・シンポジウムの様子は、2019（令和元）年12月1日付「読売新聞」朝刊に「民話の研究成果防災に生かそう―県大でシンポー」、同年12月18日「高知新聞」朝刊に「土佐の民話の魅力語る―県立大 分野横断でシンポー」と題して掲載された。

本プロジェクトのテーマである「言語文化教育としての『民話』を活用した学術的・国際的な地域還元型教育」を展開させるべく、プロジェクトメンバー全員が、さらに充実した民話研究を続けていく所存である。



講演・シンポジウムの様子（2019年11月30日）

民話 考える

「戦略的研究プロジェクト成果報告」講演・シンポジウム

高知県立大学

常光 徹氏

言語文化の視座から

参加無料
事前申し込みは
ありません

◆日時: 令和元年 11月30日(土) 13:00~16:20

◆場所: 高知県立大学永国寺キャンパス教育研究棟1階A101講義室
※永国寺キャンパスには駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください

◆問い合わせ先: 文化学部事務室 TEL:088-821-7175 FAX:088-821-7103
E-mail: shiota_yuka@cc.u-kochi.ac.jpまで

プログラム

<p>■第1部 13:00~</p> <p>○基調講演 13:00~14:00 講演 常光 徹氏「民話と俗信の世界」</p> <p>===== 休 憩 =====</p> <p>■第2部 14:10~</p> <p>○報告1 14:10~14:25 橋尾 直和 「民話の記録・保存および活用—大豊町と物部町の事例—」</p> <p>○報告2 14:25~14:40 井上 次夫「国語教育における民話」</p> <p>○報告3 14:40~14:55 田中 裕也「民話への認識の変容と戦後高知」</p> <p>○報告4 14:55~15:10 オバーク・アンドリュース「浦上崩れと土佐」</p> <p>○報告5 15:10~15:25 高西 成介「中国民話の世界」</p>	<p>■第3部 15:30~</p> <p>○パネルディスカッション 15:30~16:10 橋尾・井上・田中・オバーク・高西・ 常光氏</p> <p>○質疑応答 16:10~16:20</p> <p>■終了 16:20</p>
---	--

主催: 高知県立大学文化学部 後援: 高知県立文学館・高知県立歴史民俗資料館・高知新聞社・朝日新聞高知総局・読売新聞高知支局・毎日新聞高知支局・AKC
知放送・NHK高知放送局・KUTVテレビ高知・KSS高知さんさんテレビ・エフエム高知

講演・シンポジウム広報用リーフレット表面

民話について考える

言語文化の視座から



講師プロフィール

常光 徹夫 つねみつ とおる

国立歴史民俗博物館名誉教授・総合研究大学院大学名誉教授 博士(民俗学) 口承文芸・民俗信仰 1948年高知県生まれ。民俗学者。73年國學院大學卒業後、91年まで東京都の公立中学校教員を勤める。90年、教え子に聞いた怪談を基に『学校の怪談』(講談社)を発表。同作はベストセラーとなってシリーズ化され、同シリーズを原作とした映画が4作品作られるなどの社会現象を巻き起こした。96年より子供向け怪談シリーズ『怪談レストラン』(童心社)を著者の1人として執筆。同作は2009年にアニメ化され、2010年8月21日より実写とアニメを融合した映画が公開される。現在、國學院大學・神奈川大学大学院講師。著書に『くさの民俗学 呪術的世界と心性』(ミネルヴァ書房)、『口承文芸の研究1 学校の怪談』『口承文芸の研究2 伝説と俗信の世界』(角川ソフィア文庫)、『うわごと俗信 民俗学の手帖から』『折々の民俗学』(ともに河出書房新社)、『妖怪の通り道 俗信の想像力』(吉川弘文館)、『魔除けの民俗学 家・道具・災害の俗信』(KADOKAWA)など多数。

パネリスト プロフィール



橋尾 直和
HASHIO, Naokazu

文化学部教授
日本語学・方言学・言語学
研究テーマは、地域言語学(土佐こ
とば)の文化圏地言語学的研究



井上 次夫
INOUE, Tsugio

文化学部教授
国語科教育学・日本語学
研究テーマは、教材開発論、語
彙論・位相論



高西 成介
TAKANISHI, Seisuke

文化学部教授
中国古典文学
研究テーマは、六朝唐代の古小説の研究



オバーク・アンドリュウ
OBERG, Andrew

文化学部准教授
哲学・応用言語学
研究テーマは、自己(自分自身)、
現象学と存在、美学(特に詩)



田中 裕也
TANAKA, Yuya

文化学部講師
日本近代・現代文学
研究テーマは、三島由紀夫を中心とした戦後文学、文学理論、映画研究

アクセスマップ



高知臨海空港から…○車・タクシー・バイクをご利用の場合/約40分
○バスをご利用の場合/永国寺キャンパスまで約50分
■高知駅から…○車・タクシー・バイクをご利用の場合/約5分 ○徒歩の場合/約20分 ○自転車の場合/約10分
■はりまや橋から…○車・タクシー・バイクをご利用の場合/約5分 ○徒歩の場合/約20分 ○自転車の場合/約10分
※所要時間は目安です。交通状況によっては、時間がかかる場合があります。
駐車場がありませんので、交通機関でお越しください



一講演会場—
高知県立大学永国寺キャンパス
教育研究棟1階A101講義室

講演・シンポジウム広報用リーフレット裏面

(はしお なおかず・本学教授、いのうえ つぎお・本学教授 オバーク アンドリュウ・本学准教授、たかにし せいすけ・本学准教授、たなか ゆうや・本学准教授)

